

楚辭「九章」における望郷

——「郢」に着目して——

一 はじめに

楚辭「九章」九篇は、古來より屈原の現實的境遇を物語る作品群とされてきた。主に神話的世界への飛翔を述べる「離騷」とは異なり、「九章」は地上や河川における移動の描寫を多く含む點が特徴的である。『史記』屈原賈生列傳に「九章」の懷沙篇が屈原の辭世として引用されたことは、上記のような理解の一例である。しかし九篇の作者や背景については様々な議論があり、楚辭文學と屈原との關係を理解する上で重要な課題の一つとなっている。

王逸『楚辭章句』の「九章」序には「屈原放於江南之壑、思君念國、憂心罔極。故復作九章（屈原 江南の壑に放たれ、君を思ひ國を念ひ、憂心 極まること罔し。故に復た九章

を作る⁽³⁾」とあるが、複数の作者を想定する説も多い。中國の林庚氏は「九章」のうち惜誦・思美人・惜往日・悲回風の四篇が他篇と性格を異にしていることを指摘し、これらを屈原以降の人物による僞作とする。岡村繁氏は林氏と同様に上記四篇が遅れて制作されたと推定するが、他篇も屈原を「ヒーロー」とする後世の人物によって作られたと考える。小南一郎氏は岡村氏の説を踏まえ、「九章」が「元來はあまり相互關係の濃くはなかつた九つの作品を寄せ集め」たものであり、各篇を「性格の異なる雑多な作品」としている⁽⁶⁾。

九篇全てを屈原の作とする注釋者も各篇の相違は認識していた。たとえば明の汪瑗は『楚辭集解』思美人篇の題下において以下のように述べる。

哀郢乃作於楚襄王二十一年。況哀郢曰至今九年而不復、又曰冀一反之何時。蓋年猶可紀、而尚望其還也。此則云獨歷年而離愍、曰寧隱閔而壽考、曰命則處幽吾將罷兮。蓋歷年永久、非復可紀、安於優游卒歲、而無復望還之心矣。是此篇作於哀郢之後無疑也。

（哀郢は乃ち楚の襄王二十一年に作らる。況や哀郢に「今に至りて九年なるも復らず」と曰ひ、又た「一たび反らんことを冀ふも之れ何れの時ならん」と曰へるをや。蓋し年猶ほ紀すべく、尚ほ其の還るを望めるならん。此（引用者注…思美人篇）に則ち「獨り年を歴て愍ひに離る」と云ひ、「寧ろ隱閔して壽考なるも」と曰ひ、「命 則ち幽に處りて吾 將に罷れんとす」と曰ふ。蓋し年を歴ること永く久しくして、復た紀すべきに非ず、優游として歳を卒ふるに安んじ、復た還るを望むの心無からん。是れ此の篇の哀郢の後に作らるるは疑ひ無きなり。）

汪瑗は屈原の故郷に對する心情の變化によつて二篇の相違を説明している。清代までの注釋者には蔣驥など、各篇に屈原の境遇や心情が反映されるという立場を取る者が多かった。また近代から盛んになつた眞作と僞作との判別に

關する議論でも、たとえば望郷の念が詠われる哀郢篇を屈原の眞作とし、思美人篇を僞作とする説は多い。しかし故郷を思う心情—以下「望郷意識」と呼ぶ—は屈原自身のものであるか否かに關係なく、「九章」が持つ性格という観点から再檢討されるべきであろう。筆者は従來の解釋において屈原と強固に結び付けられていた望郷意識を、まずは特定の作者から切り離して整理する必要があると考える。

各篇における望郷意識の様相は、○作品本文から明瞭に讀み取れる場合、◎王逸注を参照しなければ讀み取れない場合、③本文・注のいずれからも讀み取れない場合の三種に大別できる。本稿では○～③の分類によつて各篇の相違を明らかにした上で、「九章」が屈原自身による作品群として編成された経緯にも考察を加える。

二 「郢」への言及—哀郢篇と抽思篇—

「九章」のうち哀郢篇と抽思篇には主人公の望郷の念が詠み込まれているが、主人公の故郷とされるのは春秋戰國時代に楚の都が置かれた「郢」である。『史記』楚世家によれば、楚は春秋時代に郢（江陵）を都としたが、戰國時代末期に壽春に遷都した際、新都を改めて「郢」と名付け

ている^⑩。楚辭作品における「郢」がいずれの地を指すものであるか特定し難いが、ここで取り上げる二篇は主人公が何らかの事情で「郢」を離れ、憂愁や悲哀を吐露している点で共通する。これは冒頭で示した分類のうち①に該当する。

まず哀郢篇のうち一〜十六句目の部分に検討を加える。

皇天之不純命兮、何百姓之震愆。民離散而相失兮、方
 仲春而東遷。去故鄉而就遠兮、遵江夏以流亡。出國門
 而軫懷兮、甲之鼂吾以行。發郢都而去閭兮、荒忽其焉
 極。楫齊揚以容與兮、哀見君而不再得。望長楸而太息
 兮、涕淫淫其若霰。過夏首而西浮兮、顧龍門而不見。^⑪
 (皇天の命を純にせざる、何ぞ百姓の震愆せる。民離散して
 相失ひ、仲春に方たりて東遷す。故郷を去りて遠きに就き、
 江夏に遵ひて以て流亡す。國門を出でて軫懷し、甲の鼂に吾
 以て行く。郢都を發して閭を去り、荒忽として其れ焉くにか
 極まらん。楫齊しく揚がりて以て容與し、君に見ゆること
 の再び得ざるを哀しむ。長楸を望みて太息し、涕淫淫とし
 て其れ霰の若し。夏首を過ぎて西のかた浮かび、龍門を顧み
 るも見えず。)

楚辭「九章」における望郷(榭原)

冒頭では動亂によつて民衆が散り散りになり、主人公も
 離京を餘儀なくされたことが述べられる。船による移動の
 描寫も見られるが、これは主人公が郢から遠ざかつていく
 ことを示す。主人公は都にある大樹の方を振り返つて嘆息
 し、涙を流しつつ進むが、船が長江の支流である夏水に至
 ると都の城門は見えなくなる。^⑫

郢を離れた主人公は歸還を望むが、次に引用する二十九
 句目以降の内容はそれが叶わないことを示唆している。

羌靈魂之欲歸兮、何須臾而忘反。背夏浦而西思兮、哀
 故都之日遠。登大墳以遠望兮、聊以舒吾憂心。哀州土
 之平樂兮、悲江介之遺風。當陵陽之焉至兮、淼南渡之
 焉如。曾不知夏之爲丘兮、孰兩東門之可蕪。心不怡之
 長久兮、憂與愁其相接。惟郢路之遼遠兮、江與夏之不
 可涉。忽若不信兮、至今九年而不復。

(羌^あ靈魂の歸らんと欲する、何ぞ須臾にして反るを忘れん。
 夏浦に背きて西のかた思ひ、故都の日びに遠ざかるを哀し
 む。大墳に登りて以て遠望し、聊か以て吾が憂心を舒ぶ。州
 土の平樂なるを哀しみ、江介の遺風を悲しむ。陵陽に當たり
 て之れ焉くにか至らん、淼として南のかた渡るも之れ焉く

か如かん。曾て夏の丘と爲るを知らず、孰か兩東門を之れ蕪れしむべけん。心怡しまざること之れ長久なり、憂と愁其れ相接す。郢路の遼遠なるを惟ひ、江と夏之れ渉るべからず。忽若として信ならず、今に至りて九年なるも復らず。

主人公が郢を去つてから年月を經てもなお歸京できずにいることは「九年」という語からわかる。哀郢篇の内容は主人公が後る髪を引かれる思いで郢を離れ、放浪を續けながら歸還を願ひ續けるといふものであり、望郷という主題が明瞭に打ち出されていると言える。

續いて抽思篇に検討を加える。この作品は本文に少歌、倡、亂という三つの部分が付屬しているが、本文中で郢への言及が見られるのは四十五〜六十六句目にあたる倡辭である。¹⁹⁾

倡曰、有鳥自南兮、來集漢北。好娉佳麗兮、胖獨處此異域。既惇獨而不群兮、又無良媒在其側。道卓遠而日忘兮、願自申而不得。望北山而流涕兮、臨流水而太息。望孟夏之短夜兮、何晦明之若歲。惟郢路之遼遠兮、魂一夕而九逝。曾不知路之曲直兮、南指月與列

星。願徑逝而未得兮、魂識路之營營。何靈魂之信直兮、人之心不與吾心同。理弱而媒不通兮、尚不知余之從容。

(倡に曰く、鳥有り南自りして、來りて漢北に集る。好娉にして佳麗、胖わづれて獨り此の異域に處る。既に惇獨にして群れず、又た良媒の其の側に在る無し。道卓遠にして日びに忘れられ、自ら申べんと願へども得ず。北山を望みて涕を流し、流水に臨みて太息す。孟夏の短夜を望めども、何ぞ晦明の歳の若くなる。郢路の遼遠なるを惟ひ、魂一夕にして九たび逝く。曾て路の曲直を知らず、南のかた月と列星とを指す。徑ちに逝かんことを願へども未だ得ず、魂路を識りて之れ營營たり。何ぞ靈魂の信直なる、人の心吾が心と同じからず。理弱くして媒通ぜず、尚ほ余の從容を知らず。)

ここでは主人公が孤獨な鳥に喩えられ、異郷に身を置いていたことが示される。故郷との離別を嘆いて涙を流し嘆息する様子は、哀郢篇の「望長楸而太息兮、涕淫淫其若霰」という表現にも通じる。「惟郢路之遼遠兮」の句や主人公の魂が歸還を願うという表現も哀郢篇に用いられていた。

抽思篇は複数の部分から構成される作品であるが、倡辭における表現は望郷と孤獨という主題によって貫かれている。無論、漢水の北に身を置いている主人公は長江や夏水の流域を放浪しているとみられる哀郢篇の主人公と異なる。しかし故郷として郢が提示されることや同一の語句が共有されることから、二篇のうち右で引用した部分の主題は共通すると考えられる。哀郢篇・抽思篇における望郷意識は本文中で明瞭に表現されるため、注釋者の説明を待たずとも讀み取ることができる。望郷の念は「郢」という地名が持ち出されることによって具體性を付與され、「涕」などの象徴によって端的に示されるのである。

なお、抽思篇には三分類の㊦に該当する側面もある。六七七句目から始まる亂辭の冒頭には「亂曰、長瀨湍流、沅江潭兮（亂に曰く、長瀨湍流し、江潭を沅る）」とあるが、王逸はここで「言己思得君命、緣湍瀨之流上沅江淵而歸郢也」―主君の命令を受けるべく、長江の淵を遡る急流に従って郢へ歸ろうとする―という解釋を行っている。しかし「歸郢」という内容は解釋の対象である二句から直接讀み取られたものというより、これに先立つ部分の内容を踏まえたものである。注(9)で擧げた淺野氏・竹治氏の

研究では抽思篇が郢への思慕の念を詠う作品とされているが、この解釋は前掲の「惟郢路之遼遠兮」の句を含む一段に基づいているのである。

三 他篇の検討

三―一 隱棲の意思―涉江篇―

涉江篇では不遇の主人公が放浪する様子が述べられており、前出の哀郢篇との類似が認められるが、兩者は決して同質の作品ではない。涉江篇における表現は冒頭で示した分類のうち㊦に該当する。以下に示すのは十三―二十二句目の部分である。

哀南夷之莫吾知兮、且余濟乎江湖。乘鄂渚而反顧兮、欵秋冬之緒風。步余馬兮山皋、邸余車兮方林。乘船船余上沉兮、齊吳榜以擊汰。船容與而不進兮、淹回水而疑滯。

（南夷の吾を知る莫きを哀しみ、且に余江湖を濟る。鄂渚に乗りて反顧し、秋冬の緒風を欵く。余が馬を山皋に歩ませ、余が車を方林に邸む。船船に乗りて余沉を上り、吳榜を齊しくして以て汰を撃つ。船容與として進まず、回水に淹り

て疑滯す。

「船容與而不進兮、淹回水而疑滯」の二句に王逸は「言士衆雖同力引權、船猶不進、隨水回流、使己疑惑有還意也」——漕ぎ手たちが力を合わせても船が前進せず、流れの只中を彷徨い、それによって自身が歸郷の願望（還意）を抱く——という注を付している。本文に見える「容與」という語は、躊躇いなどによって進む速度が落ちることを意味する。⁽¹⁵⁾

前節で示した哀郢篇にも「楫齊揚以容與兮、哀見君而不再得」という二句があるが、これに對する王逸の解釋は「言己去乘船、士卒齊舉楫權、低徊容與、咸有還意、自傷卒去而不得再事於君也」——士卒らが船を漕ぐが進まず、歸郷の願望が生じ、主君に再び仕えることができなくなるのを悲しむ——というものであり、涉江篇の注と内容が類似している。

涉江篇と哀郢篇の本文では船の動きが「容與」という語によって表現され、王逸の注ではいづれも歸還を望む主人公らが前進を躊躇っていることとして解釋されるのである。

哀郢篇の本文では郢を離れることに對する悲哀が表明されるため、船が進まないことを「還意」と結び付ける王逸の解釋は妥當であろう。その一方で涉江篇の主人公と故郷との關係は本文中に示されず、移動に對する躊躇が「容與」や「不進」などの表現によって讀み取れるのみである。涉江篇における望郷意識は、王逸の注で語られる屈原放逐の故事や哀郢篇に見える類似表現をも考慮に入れることで初めて明瞭に理解できるものである。

涉江篇では、後續の部分においても哀郢篇や抽思篇との相違が認められる。

朝發枉渚兮、夕宿辰陽。苟余心其端直兮、雖僻遠之何傷。入激浦余儻個兮、迷不知吾所如。深林杳以冥冥兮、猿狖之所居。山峻高以蔽日兮、下幽晦以多雨。霰雪紛其無垠兮、雲霏霏而承宇。哀吾生之無樂兮、幽獨處乎山中。吾不能變心而從俗兮、固將愁苦而終窮。

（朝に枉渚を發し、夕に辰陽に宿る。苟しくも余が心其れ端直ならば、僻遠と雖も之れ何ぞ傷まん。激浦に入りて余儻個し、迷ひて吾が如く所を知らず。深林杳として以て冥冥たり、猿狖の居る所なり。山峻高にして以て日を蔽ひ、下

幽晦にして以て多く雨ふる。霰雪 紛として其れ垠り無く、
 雲 霏霏として宇を承く。吾が生の樂しみ無きを哀しみ、幽
 として獨り山中に處る。吾 心を變じて俗に従ふこと能はず、
 固に將に愁苦して終に窮せんとして。）

ここでは「僻遠」(邊鄙)とされる土地へ赴くことについて、主人公の心が正しく實直であれば悲しむことはないということが述べられている。主人公の憂愁や躊躇いはなおも持續するが、歸還の意思が示されることはなく、最終的には孤獨と困窮に耐えながら山中に隠れ、節を屈することなく一生を終える決意が述べられる。このような内容は哀郢篇・抽思篇には見られない。

涉江篇において郢への言及が見られず、故郷を意味する語も用いられないこと、歸還の意思や「涕」による感情の表出が確認できないことなどを考慮すると、望郷意識は哀郢篇のみならず抽思篇と比べても不明瞭であると言えよう。

三―二 心情表現とその背景―懷沙篇・悲回風篇―

「九章」各篇に見られる移動の描寫は主人公の憂愁や悲

哀と密接に關わっているが、表現の性質は一樣でない。哀郢・抽思の二篇では望郷の念が心情表現の土臺として機能しているが、他篇における心情表現は「故郷」という概念との關連が明瞭とは言えない。その傾向は前出の涉江篇にも認められるが、次に掲げる懷沙篇・悲回風篇も典型的な例である。この二篇における表現も、三分類のうち①に該當する。

懷沙篇の冒頭部分には以下のような表現がある。

滔滔孟夏兮、草木莽莽。傷懷永哀兮、汨徂南土。胸兮
 查查、孔靜幽默。鬱結紆軫兮、離愍而長鞠。撫情效志
 兮、冤屈而自抑。

(滔滔たる孟夏、草木莽莽たり。傷み懷ひて永く哀しみ、汨として南土に徂く。胸として查查たり、孔だ靜かにして幽黙たり。鬱結紆軫して、愍ひに離りて長く鞠まる。情を撫して志を效し、冤屈して自ら抑ふ。)

冒頭では南方への移動やそれに伴う憂愁、鬱蒼と茂る草木の様子などが述べられるのみで、こうした表現の背景となる事情が示されることはない。したがって主人公が南へ

向かう理由は本文から読み取ることができない。

ところで作品後半にあたる五十七〜六十句目では、冒頭とは逆に主人公が北を目指していることが述べられる。

進路北次兮、日昧昧其將暮。舒憂娛哀兮、限之以大故。

（路を進めて北に次らんとすれば、日昧昧として其れ將に暮れなんとす。憂ひを舒べて哀しみを娛しませ、之を限るに大故を以てす。）

末尾の句には、王逸が「言己思念楚國、願得君命、進道北行、以次舍止、冀遂還歸、日又將暮、不可去也」―楚國を思い、主君の命令を受けたいと思いつつ北へ向かい、道中で宿を取り、歸還を果たそうとするが、日没が近付き進めなくなる―という注を付している。

王逸の解釋は冒頭の「傷懷永哀兮、汨徂南土」という表現を踏まえたものである。すなわち王逸は南への移動が悲哀を伴うものであることから、これが故郷を離れる屈原の様子を表しており、その一方で北への移動は故郷を目指していると考えたのではないだろうか。無論、王逸の解釋

を強いて否定する理由はないが、主人公と故郷との関係が作品本文で明示されないことには注目すべきであろう。

次に直後から始まる亂辭を検討する。

亂曰、浩浩沅湘、分流汨兮。脩路幽蔽、道遠忽兮。懷質抱情、獨無匹兮。伯樂既沒、驥焉程兮。萬民之生、各有所錯兮。定心廣志、余何畏懼兮。曾傷爰哀、永歎唱兮。世溷濁莫吾知、人心不可謂兮。知死不可讓、願勿愛兮。明告君子、吾將以爲類兮。

（亂に曰く、浩浩たる沅湘、分れ流れて汨たり。脩路幽蔽し、道遠忽たり。質を懷き情を抱くも、獨り匹無し。伯樂既に没すれば、驥焉くにか程らん。萬民の生、各おの錯く所有り。心を定めて志を廣くし、余何ぞ畏懼せん。曾ねて傷み爰に哀しみて、永く歎唱す。世溷濁して吾を知る莫く、人心謂ふべからず。死の讓くべからざるを知り、願はくは愛しむ勿らん。明らかに君子に告ぐ、吾將に以て類と爲らんとすと。）

亂辭では「脩路幽蔽、道遠忽兮」という表現によって主人公が元居た土地から遠く離れていることが示唆される

が、漠然とした憂愁や悲哀が述べられるにとどまり、歸還の意思は明示されない。そして最後には死を恐れず己の志を貫く決意が述べられる。

また主人公が感情を抑制している點も特徴的である。⁽¹⁷⁾冒頭部分の「撫情效志兮、冤屈而自抑」という二句は直前部分で述べられる苦しみや憂いを承け、それらの感情に流されることなく平静を保とうとする意思を示すものである。また亂辭においても孤獨や悲哀が詠われる一方で、心を安定させようという意思（定心廣志）が読み取れる。哀郢篇と抽思篇では主人公が故郷を思ふあまり涙を流す描寫が見られたが、懷沙篇では主人公がそのような形で感情を露わにすることはない。

哀郢篇・抽思篇以外の作品にも、悲回風篇のように心情表現が豊かな例が見られるが、この作品も憂愁や悲哀が生起したことの原因が本文中で明示されない點では涉江篇や懷沙篇と同様である。

悲回風篇の二十一〜三十六句目には以下のような心情表現がある。

惟佳人之獨懷兮、折若椒以自處。曾歔歔之嗟嗟兮、獨

隱伏而思慮。涕泣交而淒淒兮、思不眠以至曙。終長夜之曼曼兮、掩此哀而不去。寤從容以周流兮、聊逍遙以自恃。傷太息之愍憐兮、氣於邑而不可止。糺思心以爲纒兮、編愁苦以爲膺。折若木以蔽光兮、隨飄風之所仍。

（惟れ佳人の獨り懷ふ、若椒を折りて以て自ら處る。曾ねて歔歔して之れ嗟嗟たり、獨り隱伏して思慮す。涕泣交はりて淒淒たり、思ひて眠らずして以て曙に至る。長夜の曼曼たるを終へ、此の哀しみを掩ひて去らず。寤めて從容として以て周流し、聊か逍遙して以て自ら恃む。傷みて太息して之れ愍憐し、氣於邑して止むべからず。思心を糺ひて以て纒と爲し、愁苦を編みて以て膺と爲す。若木を折りて以て光を蔽ひ、飄風の仍る所に隨はん。）

ここでは自らを「佳人」と稱する主人公が悲しみのあまり眠れぬ夜を過ぐす様子が述べられ、⁽¹⁸⁾落涙の描寫もある。しかし心情表現の背景は本文中で語られず、推測することができるのみである。以下に引用する四十五〜六十句目では主人公が元來の居場所を離れていることが示唆されるが、表現の性質は右で検討した部分と大きな差がない。

憐思心之不可懲兮、證此言之不可聊。寧逝死而流亡兮、不忍爲此之常愁。孤子唵而投淚兮、放子出而不還。孰能思而不隱兮、照彭咸之所聞。登石巒以遠望兮、路眇眇之默默。入景響之無應兮、聞省想而不可得。愁鬱鬱之無快兮、居戚戚而不可解。心鞿羈而不形兮、氣繚轉而自締。

(思心の懲るべからざるを憐れみ、此の言の聊かりそめとすべからざるを證す。寧ろ逆死して流亡するも、此の常愁を爲すに忍びず。孤子唵じて涙を投ひ、放子出でて還らず。孰か能く思ひて隱まざる、彭咸の聞く所に照らさん。石巒に登りて遠望すれば、路眇眇として默默たり。景響の應ずる無きに入り、聞きて省想せんとするも得べからず。愁ひて鬱鬱として之れ快無く、居りて戚戚として解くべからず。心鞿羈して形れず、氣繚轉して自ら締ぶ。)

注目すべき點は「登石巒以遠望兮」という句が哀郢篇の「登大墳以遠望兮」と類似していることである。これらはいずれも放浪中の主人公が高所に登って遠方を眺める様子を表す。悲回風篇の該當句に王逸は「昇彼高山、瞰楚國也(彼の高山に昇り、楚國を瞰るなり)」と注し、直後の「路眇

眇之默默」は「郢道遼遠、居僻陋也(郢道遼遠にして、僻陋に居るなり)」と解釋しているが、主人公の故郷が郢であるということは本文から読み取れない情報である。作品本文は郢への強い感情を明示する哀郢篇と類似した表現を含みつつも、主人公の境遇は詳しく説明しないのである。

また「嗟嗟」「凄凄」「曼曼」「鬱鬱」「戚戚」などのように同字を反復する擬聲語や擬態語が多用されるため、構造を同じくする句が多くなっている。「愁」や「涙」など心情に關わる語は多く見られるが、心情の原因や背景を述べることよりも表現の形式を整えることに重點が置かれているようである。中島氏は「その前後(引用者注:『紕思心』『之所仍』の部分)は憂愁を述べている句にとりかこまれているのにもかかわらず、なおも前後の憂愁をこのような美麗の句にしたてている」と述べ、竹治氏も前掲書で「その文辭は繁冗であつて、他篇と趣を異にする」と述べている⁽²⁰⁾。悲回風篇では様々な修辭を盡くした句によって主人公の心情が表現されているのである。

三—三 現状の肯定—思美人篇—

思美人篇の冒頭には「思美人兮、擘涕而佇眙(美人を思

ひ、涕を撃ひて佇殆す」と、主人公が涙を流す様子が述べられており、この表現も一見したところ哀郢・抽思の二篇に通じるように思えるが、主人公の悲しみの背景が具體的に語られることはない。この作品は三分類のうち③に該当する。以下で三十一〜五十二句目の部分を詳しく検討する。

開春發歲兮、白日出之悠悠。吾將蕩志而愉樂兮、遵江夏以娛憂。擊大薄之芳茝兮、搴長洲之宿莽。惜吾不及古人兮、吾誰與玩此芳草。解篇薄與雜菜兮、備以爲交佩。佩繽紛以繚轉兮、遂萎絕而離異。吾且儻侗以娛憂兮、觀南人之變態。竊快在中心兮、揚厥憑而不竣。芳與澤其雜糅兮、羌芳華自中出。紛紛郁其遠承兮、滿內而外揚。情與質信可保兮、羌居蔽而聞章。

(開春發歲、白日出でて之れ悠悠たり。吾將に蕩志して愉樂し、江夏に遵ひて以て憂ひを娛しましめんとす。大薄の芳茝を撃り、長洲の宿莽を搴る。吾の古人に及ばざるを惜しみ、吾誰と此の芳草を玩ばん。篇薄と雜菜とを解き、備へて以て交佩と爲す。佩繽紛として以て繚轉するも、遂に萎絶して離異す。吾且に儻侗して以て憂ひを娛しましめ、南人の

變態を觀んとす。竊かに快中心に在りて、厥の憑りを揚げて歎たず。芳と澤と其れ雜糅し、羌芳華は中自り出づ。紛紛郁として其れ遠く承けられ、内に満ちて外に揚がる。情と質と信に保つべく、羌蔽なるに居るも聞は章らかなり。

この部分からは、主人公の不遇を示しつつも現状を肯定的に捉えようとする意識が窺える。主人公の美點は芳香が立ち昇るように表れ(羌芳華自中出)、暗い場所に身を置いていても名聲は世に傳わる(羌居蔽而聞章)とされる。

思美人篇における表現は、ここまでの部分で見えてきた作品の性格を理解する上で有効な視座を提供する。思美人篇の主人公は「蔽」なる場所に身を置きつつも自尊心を害うことがないため、現在の境遇がある程度肯定される。林氏が前掲書において思美人篇の特徴を「通篇逍遙自得多於哀怨(一篇を通して、氣ままで満足げな印象が哀怨よりも強い)」と説明しているのも、こうした側面に着目したためである。²¹⁾

思美人篇の「遵江夏以娛憂」は哀郢篇に見える「遵江夏以流亡」と同じく江水や夏水の流れに沿って移動することを表すが、郢への言及は見られない。また汪瑗が指摘する通り望郷意識も読み取ることができないが、これも右で述

べた特徴と無関係ではない。

哀郢・抽思の二篇では叶うことのない歸郷への望みが述べられるため、主人公が現状に満足しているとは考えにくく、思美人篇との間には大きな相違が認められる。また涉江篇では隱棲の意思が表明され、主人公が自らの不遇を進んで受け入れていたが、これは望郷意識とは異なる志向であろう。望郷以外の意識が表れていることは、思美人篇もまた同様である。更に懷沙篇では感情の抑制が、悲回風篇では修辭的配慮が認められたが、これは二篇の制作に関わった人物が哀郢篇や抽思篇を作った人物とは異なる背景を有していたことを窺わせる。

三一四 その他の作品について

「九章」にはすでに検討した六篇以外にも惜誦篇・惜往日篇・橘頌篇がある。本稿の冒頭で「九章」が地上や河川における移動の描寫を含むことを述べたが、ここまでの部分で検討してきた六篇が概ねこの条件を満たすのに對し、惜誦以下の三篇における状況は異なる。各篇に見られる表現のうち、本稿の論旨に関わる部分を以下にまとめておく。

惜誦篇の八十句目「心鬱結而紆軫（心鬱結して紆軫す）」は、前掲の懷沙篇冒頭部分に見える「鬱結紆軫兮」に類似するが、懷沙篇と異なり主人公が移動している様子は讀み取れない。惜誦篇の末尾には「矯茲媚以私處兮、願曾思而遠身（茲の媚を矯げて以て私かに處り、思ひを曾ねて身を遠ざげんことを願ふ）」という表現があり、元來身を置いていた場所から自ら離れようという意思が示される。これは故郷への執着を示す○の表現とは性質を異にしている。

惜往日篇の十五・十六句目には「弗參驗以考實兮、遠遷臣而弗思（參驗して以て實を考へず、遠く臣を遷して思はず）」という表現があるが、これは主君への批判や放逐という處遇に對する不満を述べるものである。○の表現のように遠方へと去っていくことを躊躇い歸還を望むのではない。ところで、哀郢篇の六十四・六十五句目にも「信非吾罪而棄逐兮、何日夜而忘之（信に吾が罪に非ずして棄逐さる、何ぞ日夜之を忘れん）」とあり、放逐に對する不満が述べられるが、これに先立って「亂曰、曼余日以流觀兮、冀壹反之何時。鳥飛反故鄉兮、狐死必首丘（亂に曰く、余が目を曼くして以て流觀し、壹たび反らんことを冀ふも之れ何れの時ならん。鳥は飛びて故郷に反り、狐は死するに必ず丘を首にす）」と歸還

を願う言辭が見られる。惜往日篇における表現は哀郢篇と異なり、周圍の文脈から望郷意識が讀み取れない。

橘頌篇は十五・十六句目に「紛緇宜脩、婁而不醜兮（紛緇として宜脩にして、婁にして醜からず）」とあるように橘の美質を褒め稱える作品であり、もとより不遇の人物の心情を詠う作品ではない。主人公の移動にも言及されず、むしろ「受命不遷、生南國兮（命を受けて遷らず、南國に生ず）」のように江南の地から動くことのない橘の様子が述べられる。

上記三篇には郢への言及が見られず、歸還への願いが示されることもない。これは本文のみならず注においても同様であるため、㊶にも㊷にも該當しないことになる。これらの篇における表現については別途詳しい議論が必要であるが、本稿では望郷意識の有無という観点から㊸に含めておく。

四 後世の作品における「郢」

ここまで、「九章」九篇では望郷という主題が決して普遍的でないことを述べてきた。かかる様相を作者の境遇以外の方法によって説明するためには、後世の楚辭作品にも

目を向ける必要がある。

「九章」以降に作られたとみられる作品群の中でも、望郷意識が表明される作品は決して多くない。郢への言及が見られる作品の数は更に限定される。郢を故郷として提示する表現が確認できるのは、劉向の作と傳わる「九歎」九篇と王逸の作と傳わる「九思」九篇のうち、一部の篇のみである。郢への言及例はとりわけ「九歎」に多く、たとえば憂苦篇の末尾には以下のような形で見える。

遭彼南道兮、征夫宵行。思念郢路兮、還顧睠睠。涕流交集兮、泣下漣漣。歎曰、登山長望、中心悲兮。菀彼青青、泣如頽兮。留思北顧、涕漸漸兮。折銳摧矜、凝汜濫兮。念我營營、魂誰求兮。僕夫慌悴、散若流兮。

（彼の南道を遭り、征夫 宵行す。郢路を思念し、還顧して睠睠たり。涕流れて交ごも集まり、泣下りて漣漣たり。歎に曰く、山に登りて長望し、中心 悲しむ。菀として彼の青青たる、泣頽るるがごとし。思ひを留めて北のかた顧み、涕漸漸たり。鋭きを折り矜なるを摧き、凝として汜濫す。我が營營たるを念ふ、魂誰をか求むる。僕夫 慌悴して、散じて流るるが若し。）

郢に對する望郷意識は「九章」の哀郢篇・抽思篇に特徴的な要素であつたが、「九歎」では上記二篇に類似する表現が複数見られる。⁽²²⁾ また離世篇の「顧瞻郢路、終不返兮（郢路を顧瞻するも、終に返らず）」や愍命篇の「山中幽險、郢路遠兮（山中幽險にして、郢路遠し）」など、「九章」の二篇に共通して見られた「郢路」の用例が多い。

「九歎」は「覽屈氏之離騷兮、心哀哀而怫鬱（屈氏の離騷を覽れば、心哀哀として怫鬱す）」（惜賢篇）や「歎離騷以揚意兮、猶未殫於九章（離騷を歎じて以て意を揚ぐれども、猶ほ未だ九章には殫くさず）」（憂苦篇）などのように、楚辭作品の中で唯一つ屈原と「離騷」「九章」との關係を明示する作品群である。しかし屈原が「離騷」などを作つたことを述べる資料は『史記』屈原賈生列傳の「屈平疾王聽之不聰也、讒諂之蔽明也、邪曲之害公也、方正之不容也、故憂愁幽思而作離騷（屈平 王の聽くこと聰からず、讒諂の明を蔽ひ、邪曲の公を害し、方正の容れられざるを疾む。故に憂愁幽思して離騷を作る）」や「太史公曰、余讀離騷天問招魂哀郢、悲其志（太史公曰く、余 離騷・天問・招魂・哀郢を讀み、其の志を悲しむ）」などという記述が最初のものである。⁽²³⁾ 『史記』で言及される「九章」の作品が哀郢・懷沙の二篇のみであ

り、前掲の「九歎」憂苦篇の一節が「九章」という語を記す最初の例であることに鑑みれば、該篇の成立が「九章」九篇並びに『史記』より遅れるという推測が成り立つ。⁽²⁴⁾

さて王逸の作とされる「九思」にも遭厄篇の「悼屈子兮遭厄、沈玉躬兮湘汨（屈子の厄に遭ひ、玉躬を湘汨に沈めたるを悼む）」のように、屈原の故事を踏まえた表現が見られる。郢を故郷として提示する例としては、同篇の「攀天階兮下視、見郢郢兮舊宇。意逍遙兮欲歸、衆穢盛兮沓沓。思哽噎兮詰訕、涕流瀾兮如雨（天階を攀ちて下視し、郢郢の舊宇を見る。意 逍遙として歸らんと欲すれども、衆穢盛んにして沓沓たり。思ひ哽噎して詰訕し、涕 流瀾して雨のごとし）」が挙げられる。

『楚辭章句』「離騷」敘に「逮至劉向典校經書、分以爲十六卷（劉向 經書を典校するに逮至び、分ちて以て十六卷と爲す）」とある通り、王逸のみならず劉向も楚辭作品の編纂に関わっていた。「九歎」「九思」の作者とされる二人は書物としての楚辭が結實しつつある時代を生きた人物であり、楚辭文學史の後期あるいは末期に位置付けられる。「九章」を除く楚辭作品のうち、郢を故郷として提示する句の出現例が「九歎」「九思」に限られていることは何を

意味するのであろうか。

『史記』には哀郢篇への言及が見られるが、屈原が郢への歸還を願ったことは明記されない。かかる故事は「九章」各篇を屈原の作品として解釋する際に顕在化する。作品本文のみを見た場合、筆者が設けた三分類のうち①に該当する表現には望郷意識が明瞭に表れるが屈原との關連が不明瞭であり、②は屈原のみならず望郷意識との關連も明らかでない。いずれも王逸の序文や注釋による情報の補足が必要である。したがって望郷意識を屈原自身のものとするか否かは作品解釋の次元に屬する問題ということになるが、「九歎」や「九思」の制作にもまた「九章」をはじめとする先行作品の解釋が反映されていたはずである。

郢に對する望郷意識は「九章」各篇の制作の時點では一般化していなかったが、状況は各篇が解釋される段階に至って變化したと考えられる。「九歎」における屈原や「九章」への言及は、前漢中期かそれ以降に、屈原故事の形成と「九章」への理解がかなり進んだことを窺わせる。「九歎」と「九思」における表現は、郢に對する望郷意識が、作者の想像する「屈原の心情」として明確に語り直されるようになったことを示唆する。

五 おわりに

冒頭に述べた通り、「九章」各篇における作風の相違は前近代から指摘されていたが、これは屈原の心情の變化によるものとして説明されていた。本稿では心情表現のうち望郷意識の表明に着目し、特定の作者から切り離して考察を加えた。望郷意識自體は從來の注釋や研究でも注目されていたが、作者の境遇以外の觀點から各篇における具體的な相違が記述されることはなかった。望郷意識の様相を三つに分類して分析を加えた結果、哀郢・抽思の二篇では郢への歸還を望む心情が明示されるが、他篇では同様の特徴が見られないことがわかった。

續いて、かかる相違を含む作品群が屈原作の「九章」としてまとめられたことの背景に考察を加えた。屈原故事の形成と流布は『史記』屈原賈生列傳という資料の出現に象徴されるが、これと相前後して始まった「九章」解釋の過程で、屈原と郢を結び付ける傾向が生まれたと推測できる。筆者は前漢中期以降に制作された「九歎」「九思」において、「九章」では一般化していなかった郢に對する望郷意識が屈原故事の一部として強調され、「九章」各篇に

對する王逸注の一部にも同様の傾向が現れたと考える。

本稿における分析は、「九章」各篇を屈原の境遇から切り離して理解することにより、漢代に流布した屈原故事と楚辭作品との關係を理解するための端緒を開いたと言える。「九章」における望郷以外の要素や「九歎」「九思」各篇の特徴など、本稿で十分に検討できなかった問題は複数存在するが、これらについては稿を改めて順次論じていくこととしたい。

注

- (1) 「九章」の一部の篇が「離騷」と異なっていることは大野圭介氏が「楚辭」九章諸篇における主人公の彷徨（『富山大學人文學部紀要』第五三號、二〇一〇年）において指摘している。
- (2) 本稿における『史記』の引用には百衲本二十四史『史記』（臺灣商務印書館、一九六七年）を用い、校勘する際はその都度注記する。以下、漢籍における異體字は正體で統一する。
- (3) 以下、本稿における王逸の序文や注の引用には馮紹祖觀妙齋刊本『楚辭章句』（藝文印書館、一九六七年）を使用する。
- (4) 林庚『詩人屈原及其作品研究』上海古籍出版社、一九八一年、一四四頁注。なお、近年の中國では林氏のような説を退け、「九章」の全ての篇を屈原作とする研究が主流となっている。任強・潘嘯龍「屈原《九章》眞偽問題探討」（『淮北煤炭

師範學院學報』哲學社會科學版、二〇一〇年、第五期）などを参照。

(5) 岡村繁「楚辭と屈原—ヒーローと作者との分離について—」『日本中國學會報』第一八集、一九六六年。

(6) 小南一郎「楚辭とその注釋者たち」朋友書店、二〇〇三年、二七頁。

(7) 引用には京都大學漢籍善本叢書『楚辭集解』（同朋舎出版、一九八四年）を用いた。

(8) 『楚辭餘論』下卷。該當箇所原文出处は「餘謂九章雜作於懷襄之世、其遷逐固不皆在江南、即頃襄遷之江南、而往來行吟、亦非一處。諸篇詞意皎然、非好爲異也」。引用には『楚辭文獻集成』（第二十五冊、廣陵書社、二〇〇八年）所收のものを用いた。

(9) 淺野通有「自序系楚辭文學の系統—九章諸編の偽託問題に關する一試論—」（『國學院雜誌』第六八卷、第九號）、竹治貞夫『楚辭研究』（風間書房、一九七八年）下篇第二章などを参照。

(10) 武王五十一年の條に「武王卒師中而兵罷。子文王熊賁立、始都郢」とあり、『史記正義』に引く『括地志』には「紀南故城在荊州江陵縣北五十里」などとある。孝烈王二十二年の條には「楚東徙都壽春、命曰郢」とある。

(11) 作品本文の引用には『四部叢刊』所收『楚辭補注』（臺灣商務印書館、一九六五年）を使用し、校勘の際はその都度注記する。

- (12) この部分については、朱熹が『楚辭集注』において「……長秋所謂故國之喬木、使人顧望徘徊不忍去也。淫淫、流兒。夏首、夏水口也。浮不進之而自流也。龍門、楚都南關三門、一名龍門、一名脩門、回望而不見都門、則其悲愈甚矣」と説いている。引用には『楚辭文獻集成』第三冊『楚辭集注』（廣陵書社、二〇〇八年）を使用した。
- (13) 底本は「淼」の字を缺く。『四部備要』所收『楚辭補注』（竹治貞夫編輯『楚辭索引・楚辭補注・附索引』中文出版社、一九七九年）によって補った。
- (14) 岡村氏は「楚辭文學における『抽思』の位置」（『集刊東洋學』第一六號、一九六七年）において、現行の抽思篇が元來は異なる二篇の作品であったとしている。本稿ではこの問題に立ち入らないが、一篇が複数の段階を経て成立した可能性は他篇についても考えられる。
- (15) 姜亮夫『屈原賦校注』（人民文學出版社、一九五七年）四〇八頁に「容與猶猶豫、不進之貌。詳離騷篇」とある。これは「離騷」の「心猶豫而狐疑兮、欲自適而不可」に對する「猶豫、不定也」という注を踏まえる（一〇〇頁）。
- (16) 中島千秋氏は『賦の成立と展開』（關洋紙店印刷所、一九六三年）第三章第二節において、楚辭作品における移動の描寫を「道行文」と呼び、これを抒情のための一手段として理解している。
- (17) 大野圭介「隱棲と死―『九章』諸篇の主題について―」（大野圭介主編『楚辭』と楚文化の總合的研究』汲古書院、二〇一四年）一七〇頁に指摘がある。
- (18) 清の王夫之は『楚辭通釋』（國立國會圖書館藏、船山遺書本）において「君子獨懷芳而不采、宵而不安於寢、旦而怡於遊、終不釋于懷抱」と解釋している。
- (19) 小南氏は注6前掲書第四章「王逸『楚辭章句』と楚辭文藝の傳承」（初出は『東方學報』第六三冊、一九九五年）において、四字の短文で構成された注が王逸以前の人物によって記されたと推測しているが、本稿では便宜的に『楚辭章句』内の注を全て王逸のものとして扱う。
- (20) 中島氏前掲書二三五頁、竹治氏前掲書七九一頁。なお、竹治氏は作中の擬聲語や擬態語を「愁鬱鬱」のように「三字の形状語」として説明している。この概念の詳細については上篇第四章第四節を参照。
- (21) 注4に同じ。
- (22) その他、「九歎」における哀郢篇の類似表現は聞一多氏の遺稿「論九章」（孫黨伯、袁審正主編『聞一多全集』五、楚辭編・樂府詩編、湖北人民出版社、一九九四年。初出は『社會科學戰線』一九八一年、第一期）の付表において複数挙げられている。
- (23) 底本では「諂」に作るが、點校本二十四史修訂本『史記』（中華書局、二〇一四年）に従い改めた。
- (24) 矢田尚子氏は『楚辭「離騷」を読む―悲劇の忠臣・屈原の人物像をめぐる―』第八章「王逸『楚辭章句』以前の屈原評價」（東北大學出版會、二〇一八年。初出は『中國楚辭學』

第十九輯、二〇一三年)において、「『史記』屈原賈生列傳において司馬遷は、「離騷」を屈原の自傳的作品と見なしており、ここに至って初めて「離騷」という楚辭作品と屈原という人物とを結び付ける解釋の存在が明確に示される」と述べる(二一五頁)。

(25) 劉永濟『屈賦通箋 附箋屈餘義』(人民文學出版社、一九六一年、一五二頁)は憂苦篇の「猶未殫於九章」ならびに王逸注を、屈原の死亡時に「九章」九篇が未完であったこととして解釋するが、本稿では竹治氏前掲書(一四五頁)の、「九章を敘べつくさぬうちに、「涙が溢れ出た」という解釋を採った。

(26) 黄松毅氏は「論《楚辭章句》中的汉代拟骚作品」(『西民族學院學報』(哲學社會科學版、二〇〇二年、第三期)において「九歎」や「九思」など漢代に制作された模擬的作品を「汉代拟骚作品」と呼び、「这些作品虽是以模拟为主,然而在创作中,作家有意无意地吸纳或排斥原作品的某些内容,从这种反应中,我们可以窥见他们是如何理解屈原及其作品的……」と述べる。

* *

作者：榊原 慎一

Author : SAKAKIBARA Shingi

標題：楚辭九章中的怀乡词句——以《郢》为中心

Title : The Expression of Homesickness in *Chu Ci's* 楚辭 *Jiu Zhang*
Zhang 九章: Focusing on Ying 郢

摘要：以往學者認為《九章》全為屈原所作的，此看法可

以說是從王逸《楚辭章句》以來的通說。然在我國近年研究中，以《九章》大部分為屈原以外之人所作的看法占優勢。本文也認為《九章》各篇中所表現出的感情不必出自屈原本人，同時針對各篇中的描寫特征，發現對故鄉強烈的懷戀只在《哀郢》、《抽思》兩篇中可以明顯看出，而在其他作品中只被暗示，或者完全未被提及。在《九章》中，乃至《楚辭章句》所載的所有作品中，懷鄉，尤其是懷_レ郢。這一感情並不具有普遍性。本文又推測一些汉代楚辭作家取法《九章》中的懷乡词句而代言屈原的感情。

關鍵詞：郢 屈原故事 類似描寫 《楚辭章句》